田子の浦港

静岡県交通基盤部港湾局

〒420-8601 静岡市葵区追手町9-6
☎054-221-3051
URL：http://doboku.pref.shizuoka.jp/desaki3/tagonoura/index.htm

1. 概況

〈沿革〉

田子の浦港は、駿河湾の最奥部に位置し、富士山麓の南を流れる沼川と潤井川の合流点に建設された掘込式港湾である。

田子の浦港背後の岳南地域は、広大な富士山麓を背景に、温暖な気候と良質で豊富な地下水に恵まれている。そのため、遠く江戸時代から「駿河半紙」の特産地として名高く、近代になると製紙・パルプ工業を中心とする軽工業が発達した。そして戦後は、自動車・電機等の大企業が進出し、関連中小企業の設立、設備投資が相次ぎ、新しい工業地域として脚光を浴びるようになった。

そこで、昭和30年代に入ると、静岡県は産業基盤整備を中心とした総合開発計画を策定し、この岳南地域に駿河湾臨海工業地帯の拠点となる「工業港」の建設を決定した。昭和33（1958）年から、砂浜海岸の掘込式港湾では苫小牧港と共にわが国で最も早く田子の浦港第1期修築工事に着手した。田子の浦港海岸は、国内最深の駿河湾に面した急峻な海底勾配を有し、太平洋の荒波を直接うける漂砂海岸であり、厳しい施工条件であった。昭和36（1961）年に開港を迎え、翌37（1962）年に第一船の入港など、港湾管理体制が着々と整えられ、昭和39（1964）年に重要港湾の指定、同年工業整備特別地域の指定、昭和41（1966）年に貨物の輸出入と外国船の入出港が可能となる関税法による開港の指定を経て、昭和45（1970）年、着工以来12年の歳月と総工費130億円を投じた整備が完成し、名実ともに国際貿易港の仲間入りを果たした。

その後、我が国の経済の成長に合わせ、港湾の整備とともに、背後には豊富な工業用水を利用した製紙、化学工業等の製造業、また港内には石油配分基地、セメントサイロ等が多く立地し、本港はこれら企業の原材料供給基地としての役割を担うなど、国際及び国内海上輸送網の拠点として重要な役割を果たしている。

〈現況〉

令和元（2019）年の取扱貨物量は、外貿91万トン、内貿239万トン、合計330万トンに達し、主な貨物として石油製品、とうもろこし、セメント、紙・パルプ、重油等を取扱っている。

近年では、物流需要の増大及び船舶の大型化に対応するために、平成9（1997）年より中央埠頭において水深12mの岸壁改修工事に着手し、平成15（2003）年に中央1号岸壁を、平成23（2011）年に中央2号岸壁及び泊地・航路の増深・改良が完了した。現在は、大型の穀物船や鉱石船の荷役に利用されている。

また、平成12（2000）年にダイオキシン類対策特別措置法が施行、平成14（2002）年には水域の底質にかかる新たな環境基準が制定され、本港の底質土砂の一部が環境基準値を越えることが確認された。このため、「田子の浦港底質（ダイオキシン類）浄化対策事業計画」及び「富士地域公害防止計画」に基づき、平成16（2004）年に公害防止事業による浚渫除去工事に着手し、泊地・航路の増深改良事業と連携して、底質の浄化を進めている。

一方、令和元（2019）年には、田子の浦港漁協食堂を核とし、「ふじのくに田子の浦みなと公園」「鈴川海浜スポーツ公園」を含む一連の施設が「みなとオアシス田子の浦」に登録され、みなとでの交流やにぎわい創出につながることが期待されている。

〈これからの田子の浦港〉

田子の浦港が存する富士市は、平成26（2014）年度に田子の浦港の防災対策の推進と観光・交流の促進によるにぎわいづくりの創造を目的として「田子の浦港振興ビジョン」を策定した。県としては、ビジョンに基づく防災対策を富士市と連携し進めるとともに、安心して港を利用していただけるよう引き続き取り組んでいく。

また、港湾機能の維持を図るため、流入河川からの多量の土砂については計画的に浚渫を実施していくとともに、港口部の航路埋そく対策については引き続き国と連携して取り組んでいく。

底質の浄化対策については、令和4（2022）年度内を目標に土砂の除去を完了し、内外に「クリーン宣言」を行い、浚渫土砂の有効活用に向けた取り組みを推進していく。